



転生少女は
自由に生きる。

池中織奈

Orina Ikenaka

Regina



レジーナ文庫



リサ・エブレサック

双子の母親。
美しくカリスマ性があり、王族にも匹敵する影響力を持つ。
乙女ゲームではとても不幸な女性だった。

リーラ

シエル

エブレサック家の双子

「神童」と呼ばれる双子。天才的な頭脳たうまなと類稀な魔法の才能を持つ。乙女ゲームでは家庭環境が破綻たふさしていて家族仲が悪かった。1-S所属。

カイエン・サクシュアリ

風紀委員長。
生徒会長のフィルベルトと同等の権力を持つ。ゲームでは攻略対象のうちの一人だった。
3-S所属。

ヴィー・ノーヴォス

ルビアナと同じ転生者。
前世では乙女ゲームが大好きで、今も攻略対象たちを観察して楽しんでいる。1-C所属。

メルト・アイルア

1-Sに転入してきた少女。おかしな言動を繰り返すトラブルメーカー。乙女ゲームではヒロインだった彼女に、一体何があつたのか——？

エド・アルトガル

ルビアナの弟。
乙女ゲームでは攻略対象のうちの一人だった。
1-S所属。

ミカ・アルトガル

ルビアナの妹。
乙女ゲームではヒロインのライバル役だった。
1-S所属。

フィルベルト・アシュター

アルハント学園の生徒会長。
俺様タイプで偉そうだが、ルビアナにとっては誰よりも頼れる存在。乙女ゲームでは攻略対象のうちの一人だった。
2-S所属。

ルビアナ・アルトガル

乙女ゲームそっくりな世界に転生した元・日本人。
重度のシスコン&ブラコンで、弟妹の笑顔を守るためならなんでもする。
乙女ゲームでは悪役だった。
2-S所属。

目次

転生少女は自由に生きる。

7

書き下ろし番外編

結婚式

331

転生少女は自由に生きる。

プロローグ

私、ルビアナ・アルトガルには生まれつき前世の記憶がある。それだけでなく、昔から家族——特に妹のミカを見るたびに、妙な既視感きしかんに襲かわれていた。

そして、六歳の誕生日にお父様が浮気相手の子供——ミカと同年年で、私より一つ年下の弟を連れてきた時、ようやく気づいたのだ。

ここは前世の妹がハマっていた乙女ゲームの世界で、私たちはそのキャラクターなのだ。

乙女ゲームとは、私が前世を過ごした日本という国に存在するゲームのジャンルである。プレイヤーがヒロインになりきり、様々な男性との恋愛を楽しむゲームだ。

前世の妹は乙女ゲームが大好きで、よく『このキャラがいいの』『このキャラはね!』などと楽しそうに話してくれた。

当時も今と同じくシスコンだった私は、妹が可愛くて仕方がなかったので、彼女の話

だけは聞き逃すまいと真剣に耳を傾けていたのだ。

その乙女ゲームだと、弟のエドはゲームヒロインの攻略対象の一人で、妹のミカはヒロインのライバルキャラだったはず。ちなみに伯爵令嬢である私ルビアナは、エドルートと生徒会長ルートで登場する脇役——しかも完全な悪役だった。

確かゲームでのルビアナは生徒会長を好いており、彼の取り巻きをしていた。そして自分より出来のいいエドとミカを嫌っていたはずだ。

エドルートでは高飛車たかひしゃで意地悪な姉として振る舞い、生徒会長ルートでは彼に近づくヒロインの邪魔をしていたと思う。

いずれにせよゲームでの私は、少しも好感が持てないひどい脇役だったのである。といっても、現実の私はゲームのような性格じゃないし、生徒会長の取り巻きなんかしていない。何より私は前世の時から、弟や妹は可愛がるものだと思っっているのだ。

急に家に連れてこられて肩身の狭い思いをしていたエドを、私は思いつき可愛がった。最初はエドに対してよそよそしくしていたお母様にも『悪いのは浮気したお父様なんだから』と言って、二人の仲を取り持ったのだ。

もちろん、妹のミカのことも思いつき可愛がった。エドにばかり構ってミカに嫌われるのは嫌だったしね。

その結果、私たちの仲の良さは通っている学園でも有名になっている。ゲームのエドは家族仲が険悪なことに悩んでいて、そんな彼の作り笑顔に気づいたヒロインが彼を救ってあげるという攻略方法だったはず。けれど私たちの家族仲は決して悪くなんかないのだから、その点だけとつてもゲームとは全然違っていった。

そう、これはゲームではなく現実なのだ。確かに設定とかはゲームの世界とほぼ同じだし、周りの人もゲームのキャラクターとそっくりだ。でも、これは私の人生なんだから、私の好きなように生きる。ゲームの設定通りに生きる義務なんてないんだからね。

そんなわけで、私はエドとミカを可愛がりながら楽しく生きてきたのだ。そしてこの春、私は高等部の二年生に進級した。ゲームではその一ヶ月後にヒロインが転入してきたはずなんだけど、実際に来るのかなあと疑問に思っていた。

だって普通に考えたら、そんな中途半端な時期に転入してくる人なんてめったにいないもの。

そう思っていたんだけど、始業式の一ヶ月後にヒロインは転入してきた。

もしかしたら、これから本当に乙女ゲームが始まるのかもしれない。まあ私としては、とりあえずエドとミカが幸せであればなんでもいいと思っっている。

ゲームとは色々変わっちゃってるけど、もしゲーム通りなら、ヒロインは転入してきて早々エドに接触するはず。だからその前に、ヒロインが可愛い弟を任せても大丈夫な子かどうかを見定めなきゃね。

第一章 乙女ゲームのヒロインがやってきました。

件の乙女ゲームは、ヒロインが学園に転入してくるところから始まる。それからヒロインは生徒会役員や風紀委員、クラスメイトなどの男子生徒たちを『攻略』していくのだ。

今日は、そのヒロインが転入してくる日。学園内は朝からざわついている。

この学園は初等部から高等部まであり、ほとんどの生徒が初等部からの持ち上がりだ。中等部や高等部から入学してくる生徒自体が珍しい上に、今回は入学式の一ヶ月後という微妙な時期に転入してくるといふから、余計騒ぎになっているのだろう。

もっとも、騒いでいるのは主にヒロインと同じ一学年の生徒で、私たち二年や三年の生徒はそうでもないけどね。

私たちの通うアルハント学園は、由緒正しき魔法学園である。そう、この世界には前世の世界と違って『魔法』が存在しているのだ。といっても魔法を使える平民はほほいないので、この学園に通っているのは主に貴族の子息や子女のだった。

この学園では成績によってクラスが決まり、上からS、A、B、C、Dクラスとなっている。確かゲームでのルビアナは、弟や妹よりも下のクラスに所属していたはずだ。それもあって、自分より出来のいい弟妹を嫌っていたらしい。

私は魔法とかの実技はそこまで得意じゃないのだけれど、筆記の成績は学年一位なので、どうにかSクラスに入ることができた。

一応伯爵家の娘だから、私のせいで家族が恥をかかないように、勉強は頑張っている。浮気性のお父様には思うところがあるけれど、お母様とエドとミカは私にとって大事な家族なのだ。

特に、弟と妹は私の癒やしだった。プラコンとかシスコンとか言われたって構わない。そんな可愛い二人がこの春から高等部に上がったことを考えると、それだけで顔がニヤけてしまう。去年は校舎が別だったから、お姉ちゃんは寂しかったのです。

「何ニヤニヤしてるのよ」

一人でニヤニヤしていたら、友人から呆れられてしまった。彼女は乙女ゲームでは名前すらないモブキャラだったけれど、今の私にとっては大切な友人の一人だ。

ゲームでの私は一緒に悪たくみをしてくれる性悪女たちとしか交流を持っていないかっただけなのに、現実の私はクラスメイトみんなと仲良くしている。

やっぱり転生者というイレギュラーな存在がいるから、ゲームとは色々変わってしまっているのかな。

そんなことを考えつつ、私は友人の問いに答えた。

「エドとミカが高等部にいると思うと、嬉しくなっちゃって」

「……本当、ブラコンでシスコンよねえ」

「二人とも最高に可愛いからね。今日の放課後は三人で買い物に行くんだ」

「へえ。でもそれ、妹ちゃんは納得してるの？」

「文句は言ってたけど、納得してくれたよ」

私が三人で遊びに行こうと言ったら、ミカは『お姉様と二人がいいですわ。なんでエドも一緒なのですか?』と文句を言っていた。私が三人で遊びたいと言ったら、ミカも渋々納得してくれただけだ。

ミカはよくエドに対して突っかかる。といっても仲が悪いわけではなくて、喧嘩するほど仲が良いという感じなんだけどね。

今日遊ぼうと誘ったのは、二人からヒロインの様子を聞きたいっていうのも理由の一つだ。エドとミカは筆記も実技も学年でトップクラスだから、当然Sクラスに所属している。そして乙女ゲームのヒロインもそのクラスに転入してくる予定なのだ。

可愛い弟の恋人候補なんだから、しつかりチェックしとかなきゃね。

まあ、ゲームでは心優しく癒やし系な少女だったと記憶しているから、きっと現実でもいい子なんだろうけど。

なににせよ、二人の恋がバッドエンドにならなきゃいい。私はハッピーエンドが好きなのだ。

授業を終えた私はすぐに椅子から立ち上がり、鞆かばんを手にして出口の方へと向かう。早くエドとミカに会いに行きたいからだ。

あの二人は本当に可愛い。エドとミカの幸せのためなら、私はなんだってする自信がある。

教室から出ようとしたら、友人のフィルに呼び止められた。

「ちょっと待て、ルビアナ。研究課題をやらないか？」

フィル——フィルベルト・アシユターは、この学園の生徒会長だ。意志の強そうな青い瞳に、光り輝く黄金の髪。背が高く、誰もが美形だと断言するほど顔立ちが整っている。

さらには公爵家の次期当主ということもあって、この学園内でも女子からの人気は

トップクラスだった。

そんなフィルももちろん、乙女ゲームでは攻略対象の一人だ。しかも前世の妹が最も気に入っているキャラクターだったから、他の攻略対象よりも記憶に残っている。

「ごめん。今日はエドとミカと遊びに行く予定だから、明日でいい？」

私がそう答えると、フィルはちよつと不服そうな顔をしていた。けれど、私が極度のブラコン&シスコンだと知っているからか、渋々納得してくれた。

ちなみに研究課題というのは、魔法理論に関する課題だ。成績が同じくらいの人と二人一組になって取り組んでいる。提出期限はまだ先だから、今日やらなくても十分間に合うだろう。

フィルと別れた私は、ホクホク顔で一年Sクラスの教室に向かう。初等部から持ち上がり、フィルが多いから、廊下ですれ違うのは見知った顔ばかりだ。

「ん？」

エドとミカがいる教室に近づくと、誰かが言い争う声が聞こえてきた。廊下を歩く他の生徒たちも怪訝そうにそちらを見ている。

喧嘩かな？　と思いつつながら、私は騒音の発生源らしき一年Sクラスの教室の前に立つ。するとエドとミカの声が聞こえてきた。どうやら私の知らない女子生徒と三人で言い

争っているみたいだ。

普段は温厚なエドとミカが他人と喧嘩をしているという事実に、私は強い衝撃を受けて固まった。でも可愛い二人が当事者なら、黙って見ておくわけにはいかない。

「失礼します」

そう言いながら、私は扉をガラツと開ける。教室内の視線が私に集まった。

真つ先に反応したのはミカだった。

「お姉様!!」

エメラルドのような瞳を輝かせて、嬉しそうに私を見ている。

ミカは本当に可愛い。鼻肩目なしに可愛い外見をしていると思う。私が両親の地味な部分を受け継いだのに対して、ミカの顔立ちは華やかだ。

綺麗なこげ茶色の髪を腰まで伸ばしていて、貴族らしい気品を漂わせている。

お姉ちゃんはその顔を見ているだけで顔がニヤけてしまうよ。

「姉様、迎えにきてくれたんだ？」

続いて私に笑いかけたのは、弟のエドだった。

緑色の髪と黄色の瞳を持つ、小柄で可愛らしい少年。そんなエドに笑いかけられれば、誰でも母性本能を刺激されること間違いないと思う。見た目も中身も本当に可愛い自

慢の弟だ。

見るからに弟系といった感じのエドは、ゲームでもそういう位置づけのキャラだったと記憶している。人前では明るく振る舞いながらも心の中は冷めているという複雑なキャラでもあった。

「もちろん、現実ではそんなことはない……はずだ。エドが内心では私を嫌ってたとか、そういう展開はないと思いたい。そんなことになったら私はショックで死んでしまう。」

「うん。ところで何を話してたの？　なんだか言い争ってるように聞こえたけど……」
可愛い妹と弟の姿に頬を緩ませながらも、私は二人と言い争いをしていった人物に視線を向ける。

そして驚愕した。

「なっ……」

私を見て目を丸くした後、すぐに睨みつけてくる一人の少女。

それはなんと、ゲームヒロインのメルト・アイルアだった。

この世界では珍しい黒髪と黒い目は、大和撫子を連想させる。髪か目のどちらかが黒なのはそれほど珍しくないけれど、両方とも黒というのはかなり珍しい。それ以前に、前世の妹に見せてもらった画像とそっくりだから間違いないと思う。

ゲームでは穏やかな性格だったと記憶しているけれど、そんな彼女がどうしてエドやミカと言いつ争っていたのだろうか。

私は他の生徒たちにちらりと目を向ける。彼らの多くはアイルアさんに対していい感情を持っていないように見えた。きっと、みんなエドとミカの味方をしてくれているのだろう。

ゲームではクラスメイトたちとあまり仲がよくなかったみたいだけど、現実の二人はクラスメイトから慕われていて、リーダー的立場にある。この学年のSクラスがきちんとまとまっているのは二人のおかげだろうとも言われているのだ。

「お姉様、聞いてくださいませ！　この女、誰に吹き込まれたのか知りませんが、私たちの家族仲が悪いだなんて抜かすんですわよ!!」

「そうなんだよ、姉様。……確かに僕は愛人の子だけど、姉様もミカも母様も、本当の家族だっと思ってる。それなのに、この子は姉様たちが僕を苛めてるって言うんだ……」

「ん？」

二人の言葉を聞いて、私は何か引つかかるものを感じた。

——そうだ。後輩のヴィーが言っていたことが、今の状況と似ている。

ノーヴィス男爵家の次女であるヴィーも、実は私と同じ転生者なのだ。ひょんなこと

から、私たちはお互いが転生者で、同じ乙女ゲームの知識があると知った。ある時、私たちの他にも転生者がいるのかな？ と話していたら、ヴィーがこう言ったのである。

『もしヒロインが「ゲームの設定と違う」みたいなことを言ってきたら、その子も転生者で間違いないと思うんですよ。乙女ゲーム世界に転生する話は前世でいくつか読みましたけど、ヒロインが転生者ってパターンもありましたから』

「まさか……」

私はこちらを恐ろしい顔で睨みつけているイルアさんを見やる。

目が合うと、彼女はいきなり金切り声を上げた。

「なんで仲良くしてるのよ！ あなたたちは仲が悪いはずでしょう!？」

周りの生徒たちが驚いて、辺りがしんと静まる。

数秒後、真っ先に口を開いたのはエドとミカだった。

「だから、私たちの仲が悪いだなんて誰が言ったんですの!？ 私はお姉様が大好きですし、エドのことも家族だと思っていますわ!？」

「そうだよ！ なんて姉様やミカが僕に意地悪してるだなんて言うの!？ 姉様は優しいんだよ？ ミカとはたまに喧嘩することもあるけど、それでも険悪ってわけじゃないよ」

いよ」

「そうですね。確かにお姉様を独り占めできないことにはムカつきますが、エドのことを家族としては認めているんですわよ?？」

恐い顔で一氣にまくし立てるエドとミカに、私は思わず嬉しくなってしまった。お姉ちゃんは、今すぐ二人とも抱きしめたいです！

……って、そんなことを考えている場合じゃない。もしイルアさんが転生者で、この世界をゲームの世界と同一視しているなら危険だと思う。ここはあくまで現実であって、ゲームのようにいつでもやり直しが利くわけではないのだから。

「ミカもエドもそんなに怒らないの。この子、転入生なんでしょう?？ なら、変な噂を聞いて勘違いしても仕方ないと思うんだ」

私はみんなに笑っていてほしいと思う。ギスギスした雰囲気とか、ピリピリした空気とか、そういうのは大嫌いなのだ。

イルアさんが勘違いしているのなら、ここは現実だよって教えてあげたい。それでも信じてもらえなければ、私たちの仲の良さを見せてあげればいい。

というか、仲が悪いだなんて思われるのは嫌だから、仲良しなところを見せてやる。そんな私たちの姿から、ゲームと現実の違いを感じ取ってほしいと思う。



ヴィーが言っていたんだけど、乙女ゲーム世界に転生する話の中には、傲慢な態度をとっていたヒロインが悲惨な目に遭うものも多かったとか。

実際、既にアイルアさんの立場は悪くなってしまっている。このクラスの生徒たちは、エドとミカに言いがかりをつけた彼女に対していい感情を持っていないはずだ。

正直、同じ学園の生徒がひどい目に遭うのは耐えられない。だからこそ、この世界が現実であり、自分の行動次第で変えられると理解してもらいたかった。そうすれば、ゲームでいうパッドエンドにはならないんじゃないかと思うのだ。

「でも姉様……」

不満げに頬を膨らませるエドに、私はにっこり笑いかけた。

「昔も、うちの家族の仲が悪いと決めつける子がよくいたでしょ？ でも、今は私たちが仲よし家族だって、みんなわかってくれている。この子だって、そのうちわかってくるよ。だから、そんな恐い顔しないの」

これまでも、エドが愛人の子だからって色々言ってくる子はいた。そういう時はいつも以上にエドを可愛がって、『私はエドが大好きだ』ってことをアピールしてきたのだ。そのおかげか、今では家族仲が悪いんだろうとか、そんな風に言ってくる子はほとんどいない。

もつともエドの素直で優しい人柄を知ったら、誰もそんなことは言えないと思うけど。「ほら、早く買い物に行こう?」

私がそう言って笑いかけると、ミカとエドは渋々しぶしぶといった感じで頷く。

アイルアさんのことはどうにかしなきゃならないけど、その前に友人のヴィーと話し合う必要があるからね。

そして三人で教室を出たら、後ろからアイルアさんの騒ぐ声が聞こえてきたのだった。

*

翌日、私は教室でノートを広げて、友人のフィルと熱い議論を交わしていた。

「ここはこっちの方がいいだろ」

「そうかなあ。私はそっちよりも——」

私は筆記の成績だけは学年一位だから、研究課題は二位の生徒と組まされている。

もっとも私は実技が足を引っ張っているせいで、総合成績はそこまで高くない。実技に関しては、もしかするとAクラスの人たちより低いかもしれない。

平和だった前世の記憶があるからか、攻撃系の魔法を使うのをどうしても躊躇ためちってし

まうのだ。私がまともに使える魔法といたら、結界を張る魔法とか、搜索系や回復系の魔法ばかり。人を傷つけることが恐ろしくて、安全な魔法ばかり覚えてしまった。

そんな私が今取り組んでいる研究課題のテーマは、『効率のよい魔法の使い方』について。

パートナーは、生徒会長のフィルだった。

「こっちの方が絶対いいに決まってるだろ」

「でも、それだとこっちの効率が悪くなっちゃうでしょう?」

「なら、そっちもこうすれば——」

なぜ私が乙女ゲームの攻略対象と友人になってしまったかといえば、中等部時代にフィルから話しかけられたことがきっかけだった。

この学園において、成績の順位が発表されるようになるのは中等部からだ。中等部一年の時、私が筆記で一位を取ってしまったせいで、フィルに『俺に勝った奴はどういうだ』と興味を持たれたみたい。

フィルと一緒にいると目立ってしまうから、ここまで仲良くなるつもりはなかった。けれど、常に筆記で二位のフィルとは研究課題を一緒にやらなければならなかったし、何よりフィルは友達になりたいと思ってしまうような人だったのだ。

ゲームの中のフィルには、『偉そう』という印象しか持てなかった。現実のフィルも確かに偉そうではあるものの、とても友人思いだし、生徒会長として常に公平な判断ができる人だ。そういう性格だからこそ、学園でも人気があるのだと思う。

以前はフィルと仲良くしていると、ファンらしき女子生徒からよく嫌がらせをされたものだ。前世の記憶のおかげで精神年齢が高いからか、嫌がらせを受けてもいちいち傷ついたりしなかったけれど、面倒だとは思っていた。

どうしたものかなと考えていたら、いつの間にか嫌がらせは終わっていたのだ。フィルが『もうああいうことはないから安心しろ』と言っていたところを見ると、多分彼がファンに話をつけてくれたんだろう。

私は嫌がらせを受けていることを誰にも言わなかったのに、ちゃんと気づいてさらっと対処してくれるあたりは流石フィルだと思った。

それ以来、フィルと仲良くしていても何か言われたりすることはない。

「こっちの方が絶対いいって。フィルが言ってるやり方だと、魔力が無駄になっちゃうでしょう？」

「多少は無駄になるかもしれないが、威力は文句ないだろ」

「そりゃ、フィルみたいに魔力が有り余ってれば問題ないでしょうけど……魔力量が平

均以下の人にはきついわよ」

フィルの主張しているやり方なら、確かに魔法の威力は上がる。でも、その分無駄に魔力を消費してしまうのだ。一方、私の主張しているやり方であれば、魔力を必要最低限しか使わないので無駄がない。

フィルやエドやミカみたいに魔力量が多い人ならば、フィルのやり方でも問題ない。だけど、私みたいに平均くらいの魔力しか持っていない人間にとっては、少しの無駄が命取りになる場合もある。

この学園には魔物討伐の演習とかもあるのだけれど、魔力量に自信のない生徒は上手くやりくりしないと、途中で魔力切れに陥る。そして魔力切れになったら、問答無用で気絶してしまうのだ。

この世界は日本と違って、たびたび人間同士の戦いが起こる。特に貴族社会では命の奪い合いとか陰謀とか、そんなのがあふれているのだ。

だからこそ、私は魔力をできるだけ無駄にしない方法を取るべきだと思う。何かあった時のために、魔力は温存しておかなければならない。

「ルビアナくらいの魔力があれば、この方法でも大丈夫だろ」

「フィルと一緒にしないでよ。私の魔力量って、せいぜい平均より少し多いくらいなん

だから。そりゃあ、この方法が使えないこともないよ？ でも万が一の場合を考えると、やつぱり魔力は節約すべきよ」

そもそも、この世界は乙女ゲームに酷似した世界なのだ。ゲームでは一人の平凡な少女が多くの男性を魅了する——なんていう非現実的なことが起こり、ご都合主義な展開がまかり通っていた。

それに、ゲームには波乱がつきもの。この世界にそっくりなああのゲームでも、ヒロインは色々な事件に巻き込まれていた。

実際にそのヒロインが転入してきた今、何かが起こる可能性は否定できないと思う。だからこそ、万が一の事態に備えなきゃいけない。

私はゲームでは脇役だからまだいいものの、エドとフィルは攻略対象だし、ミカはヒロインのライバルなのだ。事件が起きたら巻き込まれる可能性が高い。

可愛い弟と妹はお姉ちゃんである私を守るべきだと思うし、大事な友人のフィルにも危険な目には遭^あつてほしくない。魔法は苦手だけれど、それでもいざつて時に大切な人たちを守るようにしておきたかった。

正直に言えば、ゲームのヒロインなんか転入してこなければいいのについて思っていたんだけど、転入してきてしまったのだから仕方ない。可愛いエドとミカを幸せにするために頑張ろうと思っている。

「エドとミカことは、お姉ちゃんが全力で幸せにしてあげるからね……」

「……おい、心の声が漏れてるぞ」

どうやら考えが口から漏れてしまっていたらしく、フィルから呆れ顔で指摘されてしまった。

それにしても、呆れ顔ですら様^{さま}になってるなんて……本当、美形^{びけい}って得よね。

「大体あの二人なら、お前が頑張らなくても自分たちの力で幸せになれるだろ」

フィルはエドやミカとも仲がよくて、二人の性格をよく知っている。中等部一年の時、フィルと仲良くなったことをエドとミカに話したら、二人は私が知らない間にフィルに会いに行っていたのだ。普段は何かと暗^{けん}嘩^かしてる二人なのに、そういう時は一緒に動くんだから、本当にエドとミカって可愛い。

その時フィルと何を話したのかは不明だけど、二人ともそれ以来フィルに懐^{なつ}いているから別にいいの。誰にだって話したくないことの一つや二つあるだろうしね。

「まあ、そうね。エドもミカも、自分の幸せは自分で掴み取るような子だわ。でも、これから何か……そう、何かが起きる予感がするから、二人の幸せのために私は全力で動こうと思うの」

この世界が乙女ゲームの世界だなんてファイルには言えないから、私は曖昧あいまいな言い方をした。

確かにエドもミカも、私が何もしなくても幸せになれるくらい強くて優しい子だ。でも、あのヒロインが思わぬ騒動を起こすかもしれない。それを考えると、二人の幸せのために動かなきゃって気持ちになる。

「……そうか。まあ、何かあったら言え。俺も力になってやるから」

ファイルは何か聞きたそうだったけれど、結局何も聞かなかった。

命令口調で偉そうではあったけれど、ファイルの優しさがにじみ出た言葉に、私は笑顔で頷うなずくのだった。

*

「ルビ先輩！ お久しぶりです！」

私に屈託くつたくのない笑みを見せてくれる彼女の名前は、ヴィーア・ノーヴィス。この学園の一年生で、腰まで伸びた赤茶色の髪と赤い瞳、そばかすのある顔が特徴的だ。

ノーヴィス家もれっきとした貴族だけれど、あまり裕福ではないのでどちらかと言え

ば平民寄り。生徒のほとんどが貴族であるこの学園においては、身分はかなり低い方だと言える。

ちなみに、この学園は魔力を扱える人間の育成を目指しているので、魔力さえあれば平民でも入学できるのだ。

「久しぶりね、ヴィー」

私もそう言って、にっこりと笑いかけた。

ここは高等部の裏庭の一角にある、ほとんど人が来ないような場所だ。建物の陰かげになっっているので、こんな場所があることを知らない人の方が多いんじゃないだろうか。

今は昼休みだけれど、この辺りには私とヴィー以外誰もいない。そもそも一流の料理人がランチを作ってくれる食堂が至るところにあるので、中庭で食事をとろうという人はあまりいないのだ。

この学園は王都の中心にあり、遠くから来ている生徒は寮に住んでいる。ヴィーもその寮に住んでいて、毎日自分でお弁当を作っているらしい。

ちなみに私たち姉弟は王都にあるアルトガル家の別邸から通っている。私は基本的には食堂で食べるんだけど、今日はお弁当にしてほしいって頼んで、別邸の料理人さんに作ってもらったのだ。そんなわけで、ベンチにヴィーと二人並んで座って、お弁当を

広げた。

「ところでルビ先輩！ あのヒロイン、どうも私たちと同じ転生者っぽいんですね」
前にも言ったけれど、ヴィーは私と同じく地球から転生してきた人間である。

なぜそれがわかったかという点、初等部の頃に学内でエドとミカを可愛がっていたら、ヴィーから妙な視線を向けられたのだ。

その時は、なんで見られているのかわからなかった。しかも私だけがギリギリ気づく程度で、他の人にはわからないように視線を向けてきていたから、最初は不気味だった。そんなことがしばらく続いたんだけど、ある時、ヴィーは意を決したように近づいてきて、『ちょ、ちょっと質問いいですか！』と勢いよく話しかけてきた。そして話をしてみたなら、彼女も転生者だとわかったのだ。私がゲームと違う行動を取っていたので、転生者なんじゃないかと疑っていたらしい。

そんなヴィーは『攻略対象には関わりたくない。美形は世界の宝だけど、見ていられればそれでいい！』などと言っている。前世でも美形を觀賞するのが大好きだったらしく、美形だらけの世界に転生したことを喜んではいらぬもの、攻略対象たちには絶対に関わりたくないそうだ。

だから私は、ヴィーと友達であることを誰にも言っていない。エドとミカに知られたらヴィーに会いたいわって言うだろうから、ヴィーのために秘密にしているのだ。
ちなみにヴィーはエドやミカと同じ一学年だけど、二人と違ってCクラスに所属している。

そんなヴィーも、アイルアさんが転生者ではないかと疑っているようだ。

「私もその話がしたくてヴィーを昼食に誘ったのよ。一昨日ミカとエドを教室まで迎えに行った時にね、なんで姉弟仲良くしてるんだって言われたの。だから、もしかしたら転生者なのかなって。でも私は乙女ゲームにそこまで詳しくないから、それだけでは判断できなくて……」

私はそう言って苦笑した。

ヴィーは前世で乙女ゲームにどっぷりハマっていたらしく、この世界にそっくりなゲームも全てのキャラクターを攻略するくらいやり込んだという。

それに、乙女ゲームに関する小説とかもたくさん読んでいたみたい。その中には乙女ゲームの世界に転生する話も結構あったそうだ。

ヴィーは自信満々に告げる。

「私が思うに、あの子は間違いなく転生者ですよ。まだ転入して三日目ですけど、それっぽい言動が多すぎますし」

「それっぽい言動って？」

そう問いかけると、ヴィーは勢いよく答えた。

「一番決定的なのは、明らかにフラグ回収しようとしていることですよ。例えばエド・アルトガルとの最初のイベントを起こすためには、いつも笑っている彼の心の闇に触れればいいんですが、彼女は転入初日にそれをやろうとしたみたいです。それに昨日は生徒会書記とのフラグを回収しました！」

乙女ゲームにはフラグというものがある。複数の行動を選択できる場面において、特定の選択肢を選んでイベントを起こすことを『フラグ回収』と呼ぶそうだ。

イベントを起こせば『スチル』と呼ばれる特別なイラストを見られる上に、攻略対象の好感度も上がるらしい。私は乙女ゲームについてよく知らないのですが、この辺の知識はヴィーから教わった。

「見たの？」

「ええ、見ました！ ヒロインの後ろをつけて、ばっちり観察しました！ 書記が去った後にヒロインの口元が緩んでいたので、確信犯だと思います！」

「……無駄なことに才能を使うのはやめようね、ヴィー」

「無駄じゃありません！ 私、ヒロインと攻略対象を観察するためだけに、尾行と観察

の魔法をマスターしたんですから！」

ヴィーはちよつと変わった子なのだ。

『前世で大好きだった乙女ゲームの登場人物を生で見れるなんて嬉しい！ 美形キャラの色んな表情を見るのは目の保養になる！』

そんな思いから、尾行と観察に役立つ魔法だけをひたすら学んできたらしい。動機こそ不純だけれど、そのおかげでヴィーの魔法の才能が開花した。今では気配を完全に消すことができ、誰かを尾行してもまずバレないという。

私と同じく平和な日本で育ったからか、攻撃魔法はどれも苦手で、あまり使えないらしい。でも尾行や観察のための魔法に関して言えば、魔法師と呼ばれるトップクラスの魔法使いばかりが所属する組織——魔法師団にスカウトされてもおかしくないレベルだと思う。だって、あのフィルにさえ全く気づかれないんだもの。

尾行や観察に役立つ魔法は、この世界ではとても重宝される。その方面に優れている人は、密偵やハンターなどの仕事につけるそう。情報収集する際に役立つのはもちろん、魔物に気づかれることなく近づいたりとか、そういう時にも使えるらしい。

ヴィーはできるだけ目立ちたくないからと言って、実技の授業では実力を見せないようにしている。でも相手に気づかれずに攻撃するとか、遠距離から針なんかを投げつけ

て昏睡こんすいさせるとか、そういうことに關してはかなり評価が高いみたいだ。そんなすごい才能を持っているというのに、ヴィーの能力はもっぱらヒロインと攻略対象に關する情報収集に使われている。本当、その才能を別のことに使えばいいのにと呆れてしまう。

まあ、ヴィーが楽しそうだからいいんだけど。

「というか、ヴィーって攻略対象には関わりたくないとか言いながら、サラガント先輩とは普通に交流してるわよね」

「あれは……不可抗力ってやつです！ 奴が攻略対象だって最初から気づいていれば、死んでも関わらなかつたのに……!!」

「サラガント先輩がそれ聞いたら、落ち込むと思うわよ」

三年生のヴァルガン・サラガント先輩は生徒会副会長だ。サラガント侯爵おおいの甥であり、乙女ゲームの攻略対象の一人でもある。

そして何を隠そう、ヴィーの幼なじみなのだ。

ヴィー曰く、ゲームのヴァルガン・サラガントとは印象が違いすぎて、最初は全く気づかなかつたらしい。仲良くなつてから気づいたものの、今さら関係を切るのもどうかと思ひ、なんだかんだで仲良くしているそうである。

私もサラガント先輩とは何度か会話したことがあるけれど、確かに前世の妹やヴィーが話してくれたゲームのヴァルガン・サラガントとは印象がまるで違っていた。

これは多分……というか絶対にヴィーの影響だと思う。こんなに個性的な子が近くにいたら、影響されちゃうのは当たり前だよ。

別邸の料理人さんが作ってくれたお弁当を口にしながら、私はそう思った。

「サラガント先輩もかなりの美形よね？ 幼なじみだからすぐ近くで見られるんだし、いいじゃない」

「甘いですよ、ルビ先輩！ いくら美形だろうと、見すぎれば飽きます。奴の顔なんて、もうとっくに見飽きました。泣き顔、怒り顔、呆れ顔、笑顔……どれも散々さんざん見てきたので、今さら見たって新鮮味がありません！」

口ではこんなことを言っているけれど、ヴィーはサラガント先輩に何かあつたら心配するくらいには、彼のことを大切に思っている。私といる時もよくサラガント先輩の話をするし、本当は結構好きなんじゃないかな。

素直じゃないヴィーを見ていると、つい笑みがこぼれた。

「本当にヴィーはサラガント先輩と仲良いわよね」

「もう、奴のことなんかどうでもいいんです！ それより、エブレサク家の双子が明

後日^{きって}久々に登校するらしいですよ!」

ヴィーはそう言って新たな話題を振ってきた。

エブレサック家の双子というのは、乙女ゲームの中でも重要な立場にあるキャラクターだ。

侯爵家の双子である、シエル・エブレサックとリーラ・エブレサック。兄のシエルは乙女ゲームの攻略対象で、妹のリーラはヒロインのライバルキャラだった。

二人は神童と呼ばれるほどの天才で、正直、学園に通う必要なんかないんじゃないかってくらい優秀だ。ちなみに二人ともエドとミカと同じクラスである。

彼らはまだ学生の身でありながら、様々な業界に名を知られている。

研究を重ねて新しい魔法を生み出したり、便利な魔法具を作って国中に普及させたり、人里近くに現れた魔物を二人だけで退治したりと、そういう逸話がいくつもあるのだ。

そんな二人は各所から引つ張りだこになっているらしく、忙しすぎて学園に登校できない日も多い。ここ最近もしばらく休んでいたようだけど、ヴィーによれば明後日久々に登校するという。

「あの二人もゲームとは大分違うから、本当にゲームと同じ日に登校してくるのかなって思ってたんですけど、そこはどうやらシナリオ通りみたいです!」

私はヴィーの話に^{うなず}頷く。

ゲームでは明後日登校してくるらしいんだけど、ほとんど学園にこない双子がシナリオ通りに登校してくるとは私も思っていなかった。

「エブレサック家って、確かゲームでは家庭環境が^{はたん}破綻^{たん}していて、あの双子もお互いに疎遠だったのよね?」

「そうですね! ゲームでは、あそこの家庭は色々複雑でしたからね」

ゲームでのエブレサック家の事情はヴィーから色々聞かされてきたけど、何度聞いても壮絶な家庭環境だと思う。父親は母親に暴力を振るっていて、双子の仲もかなり険悪だったらしい。

まあ、うちも私が転生者でなければ複雑な家庭環境になっていただろうし、エドはゲームの通り辛い思いをしていたかもしれない。けれど、ゲームでのエブレサック家の事情はそれ以上にひどいものだった。

「でも、現実は全然違うわよね!」

「そうですね。エブレサック家の家族仲は全然悪くないですし、あの双子も普通に仲良いですから!」

そう、ゲームとは全然違うのだ。

あの二人は初等部からずっとこの学園に通っているから、私も彼らのことは少なからず知っている。彼らが神童と呼ばれているのはゲームの設定と同じだけれど、それ以外は全く共通点がなかった。

何より、ゲームではあの二人の性格の原因だった『家族仲の悪さ』という設定が、現実には存在しない。

「双子の両親は、彼らが生まれる前からずっと仲良しなんでしょう？　ということは、あの二人の両親がその近くに転生者がいるのかしら」

「誰かはわかりませんが、それは確かでしょうね。そうじゃなければ、ゲームのシナリオ通りになっていたはずですよ。この学園でも、私やルビ先輩がほとんど関わっていないキャラは、本当にゲームそのまんまって感じですよ……」

人ってちょっとしたきっかけで変わるものだから、前世の記憶を持つ転生者が絡んだことで歯車がずれて、双子の人生はいい方向に変わったんだと思う。

誰がその転生者なんだろうと気になるけれど、今のところ目星はついていない。

「とりあえずヒロインがエブレスアック家の双子にどう反応するかを見れば、彼女が転生者かどうかはつきりするわよね」

「そうですね。もしルビ先輩の家と同じく家族仲が悪いと思えば、彼女が転生

インは間違いなくこのゲームを知っている——つまり転生者だということになります」

うちはエドだけ母親が違うから、アイルアさんは誰かからそれを聞いて仲が悪いと思っただけかもしれない。でもエブレスアック家の場合は家庭環境になんの問題もないので、『家族仲が悪い』などと思っただけはありえない。

だから、双子に対する言動次第でヒロインが転生者かどうかわかるのだ。

「もしアイルアさんが転生者だとしたら、この世界はゲームじゃなくて現実なんだってわかってくれればいいんだけどなあ……」

「そうですね。それが彼女にとっても一番いいでしょう」

とにかくアイルアさんが私たちと同じ転生者かどうかは二日後にならないとわからないってことで、彼女の話はそこで一旦終わった。

その後はヴィーとのんびり世間話をしながら昼休みを過ごしたのであった。

第二章 ヒロインは色々起こしているようです。

——生徒会長のフィルベルト・アシユターが、転入生を気に入ったらしい。そんな噂が出回ったのは、ヴィーと久しぶりに会った翌日のことだった。

次にアイルアさんのことが噂になるとしたら、エブレサク家の双子と接触した時だろうと思っただけで、それより先にフィルと接触したみたいだ。

確かゲームでの二人の出会い、ヒロインが生徒会長のフィルに臆することなく意見を言い、彼に気に入られるっていうものだったと思う。

それにしても、ヴィーは今日アイルアさんがフィルに接触することをなぜ教えてくれなかったのだろう。きっとヴィーなら知っていたはずなのに。

そんな風に思いながら、私はフィルの席を見やる。今は授業中だけれど、フィルは生徒会の仕事があるからか、教室にはいない。

生徒会役員になれるのは、基本的に貴族の中でもトップクラスの家の子息子女ばかりだ。将来この国の上立つ者としての経験を積ませるためもあって、この学園の生徒会

の仕事は日本の高校とは比べものにならないほど多い。

前世の妹から聞いて大変だなあと呑気に思っていた私は、実際にその仕事ぶりを目にして驚いた。そんなことまで生徒会がやるのかと思ってしまうような仕事ばかりだし、仕事量も信じられないくらい多いのだ。

そうした仕事をきちんとこなせるだけでも、本当にフィルってすごいと思う。態度はちょっと偉そうだけど、それでもみんなから慕われているのは、生徒会長としての役目をきっちり果たしているからだと思う。

でも、だからこそ不思議だった。自分の影響力の強さを知っているはずのフィルが、なぜ周囲から『転入生を気に入ったらしい』と噂されるような行動をとったのだろうか。

それと同時に、強い不安に襲われる。まさかフィルはこれからゲームと同じようになっってしまうのだろうか。そう思うと、なんとも言えない気持ちになった。

とにかく今度フィルに会ったら、どういふことなのか聞いてみようと思う。

そんな風に考えていたら、四時間目の授業が終わって昼休みになった。

教室の扉がガラッと開かれ、クラスメイトたちが一斉に視線を向ける。教室に入ってきたのはフィルだった。

ファイルはいつだって注目を浴びている人だけど、今日は転入生との噂うわさのせいかな、余計に注目を浴びているようだった。

そういえば、ゲームでのファイルは教室にはあまり顔を出さなかったと、前世の妹やヴィーが言っていた。でも、現実のファイルは生徒会の仕事が付いたらすぐ教室に戻ってくる。

「ファイル、生徒会の仕事は終わったの？」

「ああ。大方片付けてきたから、午後は授業に出られる。昼は食堂で食べるから、ルビアナも来い」

ファイルに話しかけたら、いかにもファイルらしい命令口調で昼食に誘われてしまった。

私は日によって違う人とお昼ご飯を食べている。ヴィーと食べたり、エドやミカと食べたり、ファイルと食べたり、他のクラスメイトと食べたり……

今日はクラスメイトと食べる予定だったから、ファイルの言葉を聞いて思わずその子の方を見てしまった。すると、彼女は無言で『行っていいよ』的なジェスチャーをした後、さっさと他の女子グループに交ざってしまう。

それを見た私は申し訳ないと思いつつ、「行くわ」と答えてファイルと教室を出た。

ファイルと並んで廊下を歩いていると、他の生徒たちの視線が集まるのがわかった。

本当、ファイルって目立つのだ。女子生徒の中にはファイルのファンが多いし、ファイルに憧れている男子生徒も結構いる。流石さすがは二年生にして生徒会長に選ばれるほどの人気者だと思う。

「そういうえばファイル。ファイルが転入生の子を気に入ったって、噂うわさになってるみたいだけど……」

「ああ、アイルアのことか」

その言葉を聞いた私は、ファイルはアイルアさんのことをそこまで気に入っているわけではないのだなと思った。だって、ファイルは本当に気に入った相手のことは家名ではなく名前と呼ぶもの。

ヴィーが言うには、ファイルが気に入った相手を名前で呼ぶのは、ゲームと同じらしい。ゲームだとファイルから家名で呼ばれている状態では、まだまだ好感度が低いそうだ。

そのことから、ファイルがアイルアさんをそこまで気に入っているわけではないということがわかる。

「この俺に、初対面からいきなり突っかかってきたんだ。それを面白いと思ったのは確かだが、エドとミカからあいつのことで愚痴ぐちを聞かされていたから、そんなに気に入っ

たわけじゃない」

「……本当、エドとミカはフィルに懐いてる。私が知らないところで内緒話をしてい
ることもよくあるから、お姉ちゃん寂しい。」

いや、二人が私の友達と仲良くしてくれてるのは嬉しいけれど、私よりフィルの方を
頼りにしてるのかなーと思うと、フィルにヤキモチを妬いてしまいそうだ。

「でも、『気に入った』って発言したとか聞いたけど」

それほど気に入っていないなら、なぜそういう発言をしたのか疑問だ。

「あー。あいつ、人が大勢いる前で俺に話しかけてきたからな。邪険に扱ったら、あいつが苛められるかもしれないだろ。逆に気に入ったって周りに示しておけば、下手に手
を出す奴はいないはずだ」

「なるほど……でもフィルに気に入られたら気に入られたで、ファンの子たちから嫌が
らせされるんじゃないかしら？」

「大丈夫だ。あいつらのことはルビアナが嫌がらせされた時にちゃんと躡けたからな。
流石にそこまで学習能力のない奴らではないだろう」

それを聞いて、私は微妙な気持ちになった。フィルって普段は優しいけど、いざって
時には容赦のない人だから、きつとファンの子たちを徹底的にやり込めたんだと思う。

私への嫌がらせて、ある時を境にびたりと止まったからなあ。

まあ、ファンの子たちもフィルを二度と怒らせたくないだろうし、それを考えればア
イルアさんには下手に手を出さないはずだ。

「あの子、私たち家族のことを色々勘違いしてるらしいのよね。どうにかその誤解を解
きたいんだけど……。エドとミカに面と向かって『家族仲が悪いはずだ』なんて言った
せいで、クラスメイトの反感を買っちゃったみたいだし……」

ゲームのことを言っても理解してもらえないだろうから、私はそういう言い方をした。
「それもエドとミカから聞いた。ルビアナたちの仲が悪いだなんて、いつの噂を信じて
るんだよって話だよな」

「そういう風に言われてたのって、初等部時代の話だものね」

初等部の頃は、私たち家族の仲が悪いという噂があった。それを蒸し返されたような
ものだから、余計にエドとミカは怒っているのだと思う。あの頃は周りから色々言われ
て大変だったもの。私たちは仲良しなんだって一生懸命アピールしたっけ……

と、昔を思い出して遠い目になってしまう。

「ルビアナたちの仲が良いのは見ればわかるし、誤解はすぐに解けるだろう」

「……そうだといいんだけど」

私はエドとミカのことが大好きだし、人前でもベタベタしているから、この学園では仲良し姉弟として有名だ。でも、乙女ゲームの世界ではそうではないことを、アイルアさんは知っている。だから仲が良いなんてありえないって思い込んでいたのだ。

それかなり強く思い込んでいたようだから、ちゃんと誤解が解けるのか、解けるとしてもいつになるのか、私は不安になってしまふ。

そんな風に会話を交わしながら、私とフィルは第一食堂にたどり着いた。この学園には食堂が四つあって、ここはそのうちの一つだ。

扉を開けて中に入ると、食堂内はやたら騒がしかった。聞こえてくる声の中には何やら非難めいたものもある。

「何かあったのかしら」

「中央が騒がしいな。行くか」

フィルは生徒会長だから、騒ぎがあれば治めなければならない。本来は風紀委員がやるべき仕事なんだけれど、今この場にはいないみたいだった。

フィルと一緒に向かった先には、生徒会役員が三人と、乙女ゲームのヒロインのメルト・アイルアさんがいた。

「メルト、これ食べる？」

「うん、食べるわ」

書記のダルトン・バストーン先輩が、アイルアさんに自分のランチを分けてあげている。

「メーちゃん、メーちゃん、こっちも美味いよ」

「ふふ、クルートがこんなに人に懐くなんてね……」

負けじと自分のランチを勧める会計のクルート・セステンスト君を、同じく会計のチイカ・ミラスアさんが微笑ましく見つめていた。

バストーン先輩は三年生で、セステンスト君とミラスアさんは二年生。二人ともAクラスに所属している。

ちなみにこの学園の生徒会は、会長一人、副会長一人、書記二人、会計二人、補佐一人という、計七人のメンバーで構成されている。

ミラスアさんは生徒会の紅一点で、ゲームではヒロインの友人だったらしい。セステンスト君とは幼なじみらしいけど、二人の間にあるのはあくまで友情であり、恋愛感情ではなかったってヴィーから聞いた。

人懐っこい雰囲気だけど、少し人見知りなところがあるセステンスト君。そんな彼がアイルアさんと仲良くなれたことを、ミラスアさんは心から喜んでいるようだ。

セステンスト君と姉弟のように仲良しで、とても優しいミラスアさんは、男女ともに

人気がある。見た目もすごく可愛いから、当然だろう。

あ、もちろん私のミカの方が百倍可愛いけれど!!

美形男子二人と美少女二人が笑い合っている——なんだかヴィーがすごく喜びそうな光景だけど、周りからは罵声はなせも飛んでいた。

まあ、フィルほどではないけれど、生徒会の三人は人気があるからね。転入してきて早々彼らに気に入られたアイルアさんを妬ねたましく思う生徒も多いのかもしれない。ゲームでもヒロインが攻略対象たちに気に入られると、周りから嫌がらせされることもあったみたいだし。

前世の妹が『今日は○○のファンの子たちに嫌がらせされたけど、どうにか勝てたの!』なんていい笑顔で言っていたのが妙に印象に残っている。

「お前ら、何やってんだ」

フィルが仲良く話す四人に近づき、呆れた声で言った。

「フィルベルト先輩!」

真っ先に声を上げたのは、なんとアイルアさんだった。目を輝かせて立ち上がった彼女は、見るからに嬉しそうだ。

アイルアさんはフィルのことが好きなのかな? そうじゃなきゃ、こんな態度はとら

ないと思う。

あ、ちなみに私はフィルが四人に近づいていく間に、さりげなく野次馬に交ざりま

した。だってアイルアさんに見つかつたら、また言いがかりをつけられるかもしれない。こんな公おおやけの場でおかしな発言をすれば、アイルアさんはもっと浮いちゃいそうだからね。

あと、私自身あんまり目立つのが好きじゃないってのも理由の一つ。私はフィルたちと違って平凡だから、注目されることに慣れていないのだ。

「会長もお昼?」

そう口にしたのはバストーン先輩だ。

背が高く、癖毛くせげが特徴的なバストーン先輩。私はあまり話したことがないから人柄まではわからないけれど、ゲームでのバストーン先輩は親しくなった相手にはとことん甘えるタイプだったらしい。

前世のヴィーは、そんなバストーン先輩にキュンキュンしていたそうだ。『現実では好きじゃないの?』と聞いたら、『美形には関わりたくありません! 自分が甘えられるより、誰かに甘える書記が見たいんです!』って言われた。

本当、ヴィーって面白い子だと思っわ。

立ち読みサンプル はここまで